

「根拠づけ論争」が意味するもの

越 智 貢

1. 問題状況としての「根拠づけ論争」

近年西ドイツで一つの論争が静かに進行している。この論争の一方の担い手は、K. ポパーの「批判的合理主義」の継承者 H. アルバートであり、彼に對抗して他方の論陣を張るのは、K.-O. アーベルを領袖とする「超越論的語用論」のグループである。

70年代の半ばから始まり現在に至っているこの論争を、当事者であるアルバートは、「60年代のいわゆる実証主義論争の継続のごときもの」(Ⅲ7, Vg1, IV6f., 60)として位置づけている。なるほど、両論争が時間的に連続していることだけでなく、アーベルの思想が実証主義論争に加わった J. ハーバーマスのそれときわめて近い類縁性を示していることをも考慮するならば、アルバートのこの指摘はまずは的を射ているといえることができよう。

だが、論争内容に眼を転じるとき、われわれはこの論争を、世界の注目を集めるほどに華々しく展開された実証主義論争の、いわば残り火にすぎないものだと考えるわけにはゆかなくなる。実証主義論争は、その発端が「社会科学の論理」に関するポパーと Th. W. アドルノの研究報告であったことに象徴されているように、学的方法論についての特定の主題に限定されて進められた。しかし、批判的合理主義と超越論的語用論との論争はそうした限定に縛られてはいない。だからこそ、ここでは前者の論争をさえ深い次元で規定するはずのより普遍的な問題、いやおそらくは学問一般にとって最も普遍的だとみなされざるをえない問題が、議論の焦点になりえたといつてよい。つまり、知の究極的な根拠づけ^①の可能性を問うこと、これがここでの中心的な争点なのである(それゆえ、いまだ固有の名称をもたないこの論争を便宜上「根拠づけ論争」と呼

ぶことにしよう）。

両論争におけるこうした争点の相違は、けっして無視されるべきことがらではない。かつてのそして今日の多くの哲学的論争が、様々な皮相的な議論の末に結局はある主張を支えるある特定の根拠の妥当性に関して戦われるのを常とし、それゆえその反面として根拠づけの手続きそのものの妥当性を不問に付し、むしろそれを無反省に認めた上で展開されたことを想起するならば、この根拠づけ論争の意義とその重要性はおのずと際立ってこざるをえなくなる。根拠づけ論争はたんに特定の根拠の適否ないし優劣を争う戦いではなく、そうした戦いを可能にする根拠づけという手続きそのものをめぐって——それゆえよりラディカルな次元で——鎗を削る思想的攻防である。批判的合理主義は究極的根拠づけの可能性を非とし、超越論的語用論はそれを是とするための議論を展開する。実証主義論争と比べるならば確かに目立たぬ戦いであるとはいえ、しかし、その論争内容に関するかぎり、根拠づけ論争は実証主義論争をはるかに凌いでいるといつてよい。

もっとも、われわれはそうした両論争の比較をこれから問題にしようとするのではない。かえって、ここでの関心は、根拠づけ論争を実証主義論争の残像からできるかぎり切り離すところから出発する。つまり、根拠づけ論争がもつラディカルな意味を考察し、そうしたラディカリズムに潜む現代哲学の苦悩とでもいふべきものを抉り出すこと、これが本稿の目指す狙いである。根拠づけ論争は、現代哲学が、特定の根拠の選択が許容される安全圏からすでに追放され、根拠づける手続きそのものをも吟味せざるをえないところにまで追い詰められている状況を、有無をいわずわれわれに突き付ける。こうしたある意味では危機的ともいいうる状況に対して、側面からだけでも目配りをしておくこと、それは、取りも直さずわれわれ自身の、現代において哲学に携わっているものとしてのわれわれ自身の、思想的足場を見極めることでもあるはずなの

である。

ともあれ、根拠づけ論争は、大筋としてはアーベルのアルバート批判という形で始められた（ただし、それ以前の時期に、論争の伏線としてポパー批判がなされている）。アーベルはアルバートのいかなる見解に異議を唱えたのか。われわれは、まず根拠づけ論争の発火点となったアルバートの思想を確認するところから、この問いにアプローチすることにしよう。

2. 「根拠づけ」とアルバート

50年代の初めにハイデガー、シェーラー、ディングラー、クローチェといった人々の影響下にあったアルバートは、その後直ちに彼らから離れほぼ全面的にポパーの主張を受け入れることになる（Vg1. III 40, I S. VII）。アルバートが自らの立場を説明するための三つの用語、1. 「徹底的可謬主義konsequente Fallibilismus」、2. 「方法的合理主義」、3. 「批判的实在論」は、その確かな証拠だといってよい。1. は知識が常に誤謬の可能性を孕んでいることを、2. はそれゆえ知識を批判的吟味という方法的戦略に晒しつつそれに替わりうる他の知識を絶えず模索する必要があることを、3. は知識の目標がそのようにしてできるかぎり現実を把握し記述することへの漸進的接近にあることを、意味するものであるかぎり（IV 9ff.）、これらは、ポパーが掲げた批判的合理主義の「根本理念」（XV 106）を三点に絞ってパラフレーズしたものにほかならない。ポパーの「ドイツ地方の枢要な遣外使節」（K. グリュンダーの言葉 Vg1. IX 84）といった、しばしばアルバートに対して加えられる揶揄は、その意味では必ずしも的確ではなないことになる。

だが、だからアルバートは独自性を欠いた代弁者にすぎないのだと考えるなら、それは予断だといわなければならない。実証主義論争の実質的な担い手が実はポパーではなくむしろアルバートであったように、批判的合理主義の啓蒙を論争の形で対外的に実践し、その実践をとおしていわば批判的合理主義その

ものを批判的に吟味する仕事を遂行しているのは、だれにもましてアルバート、
、
である。そうするなかで、彼は独自に「批判」というテクニカル・タームを鍛え
上げ、今やそれをイデオロギー「批判」のための強力な武器として使用する。
それだけに、アルバートの論点は、ポパーのそれに比べて、より先鋭化しそれ
ゆえより顕在化した形をとっている。アルバートの独自性の一つはここにあ
る。そして、「根拠づけ」つまり歴史的概念としては「充足根拠(理由)律」
を堅持する論証の手続き一がとりわけ問題となるのも、そうした彼の独自性の
文脈においてなのである。アルバートは根拠づけをどのように問題化していっ
たのか。

元来、論理実証主義との対決のなかで、検証理論に反対する控え目な見解
(「反証可能性」の理論)として生まれた批判的合理主義が、にもかかわらず分
析哲学内部の一セクトに終らず今日の広範な理論的勢力を得た理由は、むしろ
その多面的で多産的な業績にある。そして、その業績のうちには、ポパーがエ
レア学派の祖クセノパネスに自己の先駆を捜そうとしたことにも示されるよう
に (Vgl. VI 26, 152, XV 123)、批判的合理主義の「根本理念」によって思想
史の読み替えが行われたことが含まれる。ポパーは、哲学的に固定された整
理概念を持ち出して諸思想を眺めることで事足りるとせず、むしろそうした態
度を意図的に逸脱し、よりマクロな視点から思想史全体を俯瞰する。例えば、近
代の「経験主義」も「合理主義」も、彼によれば、ともに「知の源泉」を確信
し、しかもそれが得られるとする「認識論的楽観主義」に与する点では、いわば
一つ穴の貉である (XIV 5f.)。つまり、ポパーにとって思想史を理解する際の
決定的な問題は、「知の源泉」がどこにあるのか (経験にあるのか理性にある
のか) といった伝統的な問いではなく、「知の源泉」そのものを承認するのか
それとしないのかという別次元の問いなのである。

アルバートは、こうしたポパーの読み替えを「批判的理性の理念」(1963)の
、
、

なかでそのまま継承している。しかし、その際彼はそれをさらに再構成し、「知の源泉」を否認する立場を「批判的吟味の理念」へ、それを承認する立場を「十分な根拠づけの理念」へと振り分ける。後者の理念に触れて彼は次のように述べている。「古典的な合理主義と経験主義の哲学は、方法的には十分な根拠づけの理念へと方向づけられていた……。ありとあらゆる言明と事実は、認識の確実な根源すなわち絶対的にして不可疑の權威を備えている根源へと還元されることによって、積極的に根拠づけられなければならない、という充足根拠律的方法的解釈が、……古典的方法論の中核であるように思われる」（Ⅱ 19f.）。根拠づけの問題は、こうしてアルバート自身の問題領野のうちに登場することになるのである。

内容からみればポパーの指摘とほぼ変わらないアルバートの見解は、しかし視点をわずかにずらし、「知の源泉」への確信にではなくそれに基づく「根拠づけ」という手続きそのものに注目し、それを正面から際立たせることによって、いわば独自の重みを帯びてくる。とりわけドイツ語圏の文献を繙けば容易に判るように、根拠づけは、少なくとも哲学の領域では市民権を得た、いやそれどころかきわめて重視され目標とすらされる概念だといってよい。たんに歴史的古典においてばかりでなく今日においてもそうである。一例としてフッサールの現象学をここで想起することもできるだろう。「根拠づける行為のうちには判断の正当性すなわち判断の真理が……示される」と語り、「学問の絶対的な根拠づけ」を目指すフッサールは（Ⅹ 48,50f.）、アルバートの指摘に照らすならば、古典的方法論の域を少しも出ていないことになる。いや、現象学派ばかりではない。自覚的にであれ無自覚的にであれ、根拠づけの手続きによって特定の根拠を呈示し自己の主張の妥当性を導くすべての今日の思想が、「十分な根拠づけの理念」というカテゴリーのもとに統括され「古典的」とあるとの誹りを受けることになるのである。しかも、アルバートはこの理念を「独

断」だと極めつける（Vgl. I 17, 20）。先のフッサールの引用文が示してもいるように、十分な根拠づけは、充足根拠としての真理の存在つまり確実な知の存在を、暗黙のうちにそれゆえ独断的に前提しているというのが、その主な理由である。批判的合理主義の、とりわけアルバートが掲げる徹底的可謬主義の立場にあるかぎり、確かにそうした前提は斥けられるほかはない。

もっとも、アルバートがこの点について詳しく検討したのは、ポパーに捧げられた『批判的理性論考』（1968）においてであり、とりわけ同書の叙述をめぐってやがてアーペルの批判が開始されることになる。根拠づけを独断だとするより明確な論拠は何なのか。——アルバートは、この問いに、根拠づけの論理的アポリアを明らかにすることで答えようと試みる。このアポリアは、1. 「無限背進」、2. 「論理的循環」、3. 根拠づけの「手続きの中断」という三つの選択肢をなすトリレンマとして具体化される（I 13ff.）。^⑧無限背進に陥る理由は、「もしあらゆるものに対して根拠づけを要求するとすれば、そのつど根拠づけられるべき見解を……そこへと還元した認識に対しても、さらに再び根拠づけを要求せざるをえない」こと、つまり根拠づけの手続きを完結しえないことにある。この完結不能という点に注目すれば、2. は1. の特殊な事例にすぎず、それゆえアルバートのトリレンマは、実は、根拠づけによっては最終的な根拠の呈示が不可能であり、したがってそれを呈示するためには根拠づけそのものを中止せざるをえない、というディレンマつまり文字どおりの「板ばさみ」にほかならない。

この板ばさみを承認し、しかもそれ自身根拠づけられていない言明を「独断」と呼ぶならば、根拠づけの手続きは、なるほどアルバートがいうように、独断に陥らざるをえなくなる。なぜなら、根拠づけをとおしてある言明がそこへと根拠づけられる根拠は、根拠づけを中断することによってしか得られないことになるからである。それゆえ、アルバートは、しばしば哲学の領域で問題と

される「明証性」といった「自己根拠づけ」を例にとり、そうした根拠づけは「独断への訴えによる根拠づけ」にほかならないと断言する(Ⅰ14)。つまり、自己を根拠づける根拠は、例えばかつての自己を原因づける原因である「自己原因 *causa sui*」と同様、不合理な産物でしかないのである。ちなみに、この自己原因がすでにショーペンハウアーによって断罪されていることを、われわれはここで確認しておくべきだろう。ショーペンハウアーは、原因の連鎖を断ち切る自己原因を、溺れた馬を救うために水に飛び込み、自分の身体と馬とを自らの髪を掴んで引き上げたというミュンヒハウゼン男爵（1720-97）の「ほら」に喩えている（XVII25）。そうしたミュンヒハウゼンの自己原因を（おそらく）念頭におきつつ、アルバートは、根拠の連鎖を「アルキメデスの点」として支える自己根拠もまた批判に耐えないほらだと考える。ショーペンハウアーに言及しないとはいえ、彼が先のトリレンマに「ミュンヒハウゼン・トリレンマ」の名を与えるのは、そのためだといってよい。そして、この「ミュンヒハウゼンの泥沼」（IX84）を脱け出す唯一の方途、それが十分な根拠づけを放棄し、そうすることによって知の確実性をも断念する批判的合理主義の立場なのである。

以上のアルバートの分析の是非についてここでコメントを加えるのはやめておこう。ただとりあえず次のことだけは、指摘しておいてよいように思われる。つまり、根拠づけの手続きは本来「独断」（無根拠のままに主張される言明）の回避を目的とするものであったはずだが、しかし、その手続きそのものが独断に終るとされるとき、根拠づけとともに、それに支えられた知の伝統的意味が動揺せずにはいないということである。それゆえ、批判的合理主義の見解に対して、様々な立場から様々な批判が寄せられることになる。それはアルバートの上記の著書一つについてもあてはまる。アルバートは、『批判的理性論考』の第三版（1975）に「批判主義とその批判者たち」と題する長い後書き

を付け加え（第四版（1980）ではそれをさらに拡充している）、そこで「この著作に含まれる根拠づけ思想の批判に気を悪くした」（I 183）数多くの思想家の名を列挙している。そのなかには、むしろアーベルがいる。いや、前節で述べたように、批判的合理主義に対して現在最も攻撃的で執拗な抵抗を示しているのが、アーベルを盟主とするグループなのである。

3. 「根拠づけ」の復権—アーベルとクールマン

アーベルは何ゆえ根拠づけ論争に入らなければならなかったのか。一言でいえば、それは、彼が「科学の時代における倫理学の合理的根拠づけの問題」に直面したからだといってよい。その言葉をそのまま副題とした彼の主要論文「コミュニケーション共同体のアプリオリと倫理学の基礎」（1973）のなかで、この問題は「パラドックス的状况」として扱われている。つまり、「科学のテクノロジーの帰結によって打ち立てられた惑星規模の統一文明」を有する現代は、一方でそうした普遍的文明に対して拘束力をもつ普遍的倫理学を要請されているにもかかわらず、他方では「規範的に中立ないし価値自由な『客観性』という科学主義の理念」のためにかえって「普遍的倫理学の合理的根拠づけ」を行うことができない、という状況である（V 359f.）。この状況を切り抜けるために、アーベルは、カント的な超越論哲学を「意味批判的に変形」（V 411）した超越論的語用論の立場から、「科学主義の理念」の代表と目される批判的合理主義を論駁してゆくことになる。根拠づけを阻むミュンヒハウゼン・トリレンマは、そこでの説明によれば、「論証の語用論的次元を捨象する」ことによって「明証性」と「独断」とを同一視した結果にはかならない（V 406）。

こうした論点は、後により詳細に究明され、「超越論的言語 語用論の見地からみた哲学的な究極的根拠づけの問題」（1976.ただし放送用マニユスクリプトとしては1974）のなかで「批判的合理主義のメタ批判の試み」として結実する。そして、根拠づけ論争はこれを機縁として開始されることになるのである。

すぐさまこの論文に対してアルバートが批判を加え（『超越論的夢想』1975）、その批判を下敷にしたアーベル擁護論をアーベルの助手 W. クールマンが展開し（「反省的な究極的根拠づけ」1981）、さらにこれにアルバートが応じる（『科学と理性の可誤性』第4章1982）という形で、両派の攻防は続いている。以下、できるかぎり私見を交えず、アーベルの'76年論文とクールマンの'81年論文を手掛りにして彼らのアバート批判の骨子を確認することにしよう。

アーベルが当該論文で注目するのは、先にも触れたように、アルバートがトリレンマの分析に際してさして気にも留めなかった問題、つまり明証性の問題である。アルバートは明証性を、それが根拠づけられえない以上、根拠なき理論的前提＝独断として扱うわけだが、アーベルによれば、その扱いは両者の「無差別の同一視」にはかならない（VI65）。なぜなら、デカルト以降の伝統に照らしても、「明証性への遡行による根拠づけが哲学的な究極的根拠づけだとみなされるべき」であって、明証性を欠いた根拠づけは本来根拠づけの名に値しないからである。だとすれば、明証性は、根拠づけを支えそれを可能にするものではあっても、独断とは異なってけっして根拠づけを必要とするものではないことになる。つまり、「究極的根拠づけという哲学的問題」は、アーベルによれば、アルバートのいうごとき無限背進の危険を伴う「純粹に形式論理的な問題」ではないのである（VI58）。

だが、アーベルは、そう述べることによって、アルバートが反駁する古典的な明証性を救出しようとしたのではない。もしそうしたのであれば、彼とアルバートとの齟り取りは、明証性をめぐるありふれた水掛け論にしかなりえなかったはずである。彼もまた、アルバートとは別の理由ではあれ、古典的明証性が充分な根拠づけの「アルキメデスの点」とはなりえないことを承認している。しかし、その一方で、彼はそれとは次元を異にする明証性、つまり彼によって「典型的明証性 paradigmatische Evidenzen」と名づけられた新たな明

証性を確保しようとするのである。そして、この特殊な明証性が批判的合理主義によっても前提されざるをえないこと、アーベルの狙いはそれを明らかにすることにある。そうした明証性を剔出しようならば、「充分な根拠づけの理念」を「批判的吟味の理念」によって代替させようとしたアルバートの目論見は、実はその背後でさらに「充分な根拠づけの理念」によって支えられていたことになる。つまり、批判的合理主義は範型的明証性によって究極的に根拠づけられるわけであり、そのことによって同時に根拠づけの復権が達成されることになるのである。そうした復権を可能にする範型的明証性とは何なのか。

その言葉に託してアーベルが語ろうとしているのは、いかなる「言語ゲーム」においてもそれに携わる構成員の共通の了解事項——「模範」ないし「範型」（Ⅵ64）——が前提されているという（主に後期ヴェトゲンシュタインをとおして彼が学んだ）事態である。彼は、例えば航空学や気象学に関する現行の言語ゲームにおいては、「地球は自転しかつ公転している球体であるとの確信」が範型とされており、したがってそれが範型として機能しえない場面では、その言語ゲームそのものも有意味には成立しえない、という例を引いている（Ⅵ64 f.）。つまり、範型的明証性とは「言語ゲームのなかで意味に適って前提されている明証性」（Ⅵ65）の謂にほかならない。それゆえ、この特殊な明証性は、言語ゲームの成立要件としてすでに相互主観的な性格を保有していることになる。アーベルが古典的明証性——彼の言葉を援用すれば「私にとっての認識の明証性」（Ⅵ67）——を斥けるのは、そのみを拠り所とすれば相互主観的に妥当する認識の保証がなされえないからである。そうした保証をもたない明証性による根拠づけは、なるほど独断の誹りを免れない。しかし、範型的明証性はそうではない。それは、彼によれば、相互主観的明証性としていわば言語ゲームと運命をともにし、それを支えるものですらあるからである。

アーベルは、以上の論点をメタ科学的な言語ゲームすなわち「哲学的論証の言語ゲーム」に適用する。むろん、ここでは、先の地球に関する範型のような

「経験的に修正可能な言語ゲーム範型」（Ⅵ70）が問題とされるわけではない。

「超越論的言語ゲーム」として位置づけられたこの言語ゲームにおいて、彼が析出しようとするのは、もはやいかなるものによっても修正されえず、それゆえ言語ゲームであるかぎりの一切の言語ゲームが必然的に前提せざるをえないような明証性、換言すれば究極的ともいうべき範型的明証性である。究極的根拠づけは、それゆえ、この明証性に遡って遂行されることになる。必ずしも体系的に分析してはいないものの、アーベルはとりあえず以下のものをそうした範型の例として提出している（Ⅵ75）。1. 「いくつかの論理規則」、2. 「実在世界の存在」、3. 「理念的コミュニケーションの超越論的語用論的規則」（例えば、「言語的なコミュニケーションが可能なあらゆる存在者は、そのすべての行為や言表において潜在的な議論のパートナーである……がゆえに、人格として承認されなければならない」（Ⅴ400）といった「根本規範」等）——これらが、彼によれば、論証を論証たらしめる「超越論的条件」なのである。

もしそうしたアーベルの手続きを認めるとすれば（もっともその適否をここで問うことはしないけれども）、アルバートの議論は、それもまた哲学的論証であろうとするかぎり、これらの条件をすでに前提していることになる。アーベルが目するのここである。というのも、「われわれは本来あらゆることを……原理的に疑いうる」（Ⅰ14）と唱える徹底的可謬主義は、けっして疑えない特定の条件下にあることになるからである。自己の条件をも疑おうとすれば、それは自己の主張を自ら切り崩すことにも等しいといってよい。それゆえ、アーベルは、こうした事態を不問に付し明証性による根拠づけを否定する態度を、言語使用の語用論的側面を恣意的に捨象した「抽象の誤謬 abstractive fallacy」だと断罪し（Ⅵ72）、あわせて、可謬主義の原理は、「その原理が基づかざるをえない哲学的明証性」を回復してこの誤謬を是正しようとしなにかぎり、自己適用の結果、いわゆる「『嘘つき』のパラドックス」に陥るほか

はないと結論する（Ⅶ71）。「永久的批判の原理に対する究極的根拠づけの優位」（Ⅶ70）というアーペルの基本的構想は、こうして批判的合理主義が根拠づけられざるをえないことを示すことによって具体化されることになる。「超越論的言語ゲームの諸規則に対して賛同する論証も反対する論証も……、それらの規則をすでに前提していなければ可能ではない」（Ⅶ76）、これが「批判的合理主義のメタ批判の試みの帰結」として論文の末尾に記された言葉である。

彼の門下クルマンは、そうしたアーペルの所論の主旨をやや異なった角度から援護する。彼は、ある報告のなかで「アーペルの論証の中核」をいくつかの文章に纏め、その第一のテーゼとして「論証するものの状況は……背進できない」という語用論的テーゼを掲げたが（Ⅷ21）、この基本テーゼの路線に沿ってアルベルト批判を展開するのが彼の'81年論文である。彼は、ここで、アルベルトのトリレンマに関する立論の前提を以下のように指摘する。つまり、1. 「われわれが…確実なもの、とりわけ確実に妥当する言表へ到達しうるのは、ただ根拠づけによってのみである」こと、2. 「根拠づけは、根拠づけられるべきものの彼方にある根拠へと立ち還ること……によってのみ可能である」こと、3. 「われわれは、すべてのものに対して、それゆえそのつどの諸根拠そのものに対しても根拠づけを要求しうる」こと（Ⅷ5f.）。これらの前提の「問題設定のなかにすでに組み込まれた矛盾」があると考えるクルマンは、とりわけ第三の前提に注目する。なぜなら、究極的根拠づけの問いを初めから「否定的」に「解決」してしまっていると思われるこの前提は、アルベルトによって必ずしも「証明」されているわけではないからである。この前提を克服することが、ここでの彼の課題である。

もっとも、克服のためのクルマンの戦略は、アーペルの場合とほぼ同じではある。つまり、彼は第三の前提に含まれるくすべてのものに対する根拠づけ

の要求>を「懐疑」ないし「反駁」として把え返し、さらにそれらを「論証」として位置づけた上で、この論証の条件を問い、そしてそうした条件が先の前提によっては満たされえないことを示そうとする。しかも、それを示すための材料は、ここでもアーベル流の「遂行的不整合」の非難（例えば<論証条件に対する懐疑は、それが論証としてあるかぎり、自己矛盾に陥る>）であり、さらにはやはりアーベルに倣った「嘘つきのパラドックス」的攻撃（<いかなる確信も疑いうる、という確信は疑いうる、という確信は……>）である（Vgl. XII 8, 15ff., 20）。だが、むろん問題は、そうした条件がいかにして得られるのかという点にある。

これに関して、クールマンは、言語行為論に依拠しつつ、言語行為に必然的に同伴する「行為知 Handlungswissen」に手掛りを求めている（XII 10f.）。「行為についての同伴する意識・了解・知」である行為知には、彼によれば、言語行為がまさに言語行為であるための条件、すなわち「行為者によって（志向的に）立てられ、また少なくとも非明示的に想定されなければならない諸前提」が含まれる（XII 11）。つまり、われわれは、何かを主題的に論証しつつある場合、ほかならぬ論証という言語行為を遂行していることを知っており、それゆえ、その論証が例えば「まじめに考えられ」、「事実即し」、「真理に対する関心に導かれ」、「空虚でなく」、「自己矛盾せず」、「理由をもち」、「反対論証に対して開かれている」等の条件（XII 8）を背負った行為であることをすでに了解しているわけである。だとすれば、こうした行為知とそれとともに示される言語行為の条件は、もはや<根拠づけの要求>としての懐疑や反駁の対象とはなりえないことになる。なぜなら、それらは論証であるかぎりの懐疑や反駁の「構成的部分」（XII 11）であり、それらを疑うことは自らの言語行為そのものをも疑うことに等しいからである。

こうした行為知を確保する方法を、クールマンは「（厳密な）反省」と呼び

（Ⅺ10）そしてこの反省を捨象する「第二の本性となった習慣」を「理論的態度」と名づけている（Ⅺ13）。それゆえ、彼にとって、あらゆる言明を可謬的だと主張し根拠づけに際してミュンヒハウゼン・トリレンマを問題にしうるのは、理論的態度、すなわち行為知を見失うことによって「自己を喪失した理論家の位置および見方」のためにほかならない（Ⅺ24）。そうした理論的態度を脱却して自己を厳密に反省しさえすれば、少なくとも自己の言語行為の超越論的条件だけは疑いえないというのが、クルマンのアルバートに対する批判点だといってよい。かくして、彼は理論的態度から反省的態度への「態度変更」を提唱する（Ⅺ14）。そして、そうした変更による「反省概念の復権」のみが、彼によれば、批判的合理主義に巣くう「理論主義」を克服する唯一の方途なのである（Vgl.Ⅺ26）。

以上の素描からも明らかであるように、アーベルやクルマンのアルバート批判の基調は、根拠づけ概念の意味づけをめぐるものである。つまり、根拠づけはアルバートの理解とは異なって、無限背進を予想する演繹的論証ではないというのが、彼らの基本的主張である。もっとも、この点にのみ注目するとすれば、彼らの批判が画期的だとは必ずしもいえなくなる。なぜなら、根拠づけを重視した過去の超越論哲学もすでにその種の試みを残しているからである。例えば、新カント学派のB.バウフは、根拠づけ概念の特殊性を際立たせるために、それと「導出 *Ableitung*」との対比を用いつつ、次のように述べている。「われわれは、根拠づけと導出とを直ちに同一視して、導出されえない判断（つまり根拠としての判断—引用者補足—）を根拠づけられえない判断だと考えてはならない」（Ⅷ318）。しかも、彼は、アルバートのトリレンマを先取りするかのように、もしそう考えるとすれば「根拠づけが不当前提 *petitio principii* や循環論証 *circulus vitiosus* をおかすことになる」ことすらも指摘するのを忘れない（Ⅷ320）。

のは、それが確実な知としての真理を保証する手続きだとされるからである。だが、アーベルの根拠づけ確保論は、「認識と言語使用との絡み」を強調することに終始し、「真理のための確実なしるし」に関しては何も述べようとはしていない（Ⅱ108）。アルバートの言葉を援用すれば、「徹底的可謬主義においては、実際のところ不可疑性という意味での確実性の問題が重要なのだが、アーベルは今もって結局この問題には向かおうとはしないのである」（Ⅳ109）。

こうしたアーベルに対する疑問点は、すぐさまクールマンへの疑問へと発展する。クールマンは、<論証するものの状況は背進できない>という語用論的テーゼによって根拠づけの無限背進を食い止める。だが、このテーゼは言語の可能性の条件＝制約に関するテーゼとして、「われわれの認識能力の制限についての言明」にほかならない（Ⅳ76）。この制約・制限という消極性の確認が、疑いえない真理の保証のための積極的な論拠へといかにして転化しうるのか。クールマンがこの問いに明確に答えてはいない以上、アルバートは彼の議論には問題のすり替えがあると考える。それは、アルバートの比喩を用いれば、いわば「空っぽの筒から兎を取り出す」魔術でしかないのである（Ⅳ76,81）。

アルバートの以上の疑問点は確かに的を射ているように思われる。彼の関心はあくまで知の無謬性の問題にとどまるが、アーベルとクールマンの主張は、アルバートの可謬主義がアポリアに陥るといいうわば背理法的な批判に尽きている。根拠づけというテーマに焦点を合わせつつも、両派の議論が微妙に交差しない印象を与えるのは、このためにほかならない。そうしたアルバートの疑問点の指摘によるものか、アーベルは最近の講演のなかではやや後退したかのような意見——批判的合理主義とアーベルの立場との間には「いかなる対立も存在」せず、それがあるとすれば、ただ批判的合理主義をアーベルが「<根拠づける>ことができると信じている」点においてのみである（Ⅶ62）——を述べている。むろん、だとしても、われわれは根拠づけ論争に際してアルバート

に軍配を上げようとするのではない。われわれが注目したいのは、むしろ彼の疑問の裏返しの場面である。つまり、現代の思想家のうちで根拠づけを最も強力に弁護しようとする超越論的語用論においてさえも、根拠づけの問題はもはや古典的な根拠づけのレヴェルで立てられているのではないということである。われわれが先に「現代哲学の苦悩」と呼ぼうとした事態はこれである。アーペルやクルマンが根拠づけを保守しようとする場合、確実な知としての真理の保証が問われないということは、根拠づけの手続きが、知と無知との境界基準たるかつての地位から離れたところで、論じられていることを意味している。例えば、プラトン（『国家』447E）以来のエピステーメーとドクサの区別あるいはカント（第1批判再版序）の Philosophie と Philodoxie の区別は、もはやここでの根拠づけの直接の課題とはなりえない。エピステーメーと直結しえない根拠づけであるならば、そのかぎりではかつての哲学的な意味を失っているといつてよい。そして、根拠づけ論争がそうした非古典的な根拠づけをめぐる攻防の場であるとするならば、そうした論争もまた知の動揺に苦しむ現代哲学の苦悩の反映以外ではないといつてよいのである。

もっとも、先に述べたように、われわれは、だからアルバートの立場に与する、というのではない。彼のいう「充分な根拠づけの理念」と「批判的吟味の理念」の二者択一がはたして正しい選言だといえるかどうかという問題が、残っているからであり、そしてアルバートもアーペル派も、ともに根拠づけにとらわれて、それをめぐって排除し合う点では何ら変わるころはないともいうことができるからである。クルマンのアルバート批判が発表された年に、この点に関わるきわめて示唆に富む見解を、R.ノージックが世に問うている（『哲学的説明』1981）。彼はアルバートと同様、確実な知としての真理概念に対する無関心を示しつつも（XⅡ21,138）、しかし相手を「打ち負かす論証」をこれまでの哲学の悪弊だと分析し（XⅡ5）、むしろ「すべての対立し合う参加者

を抱み込むことによって葛藤を避けるという戦略」を摸索する（XII 654）。こうしたノージックの見解に照らすならば、両派の論争そのものが、古い伝統的な知の枠組みの所産にはかならないことになる。

ともあれ、根拠づけ論争は現在進行中でもあり、それゆえそれがいかなる結着をみるのかは、今後の問題に属している。それについての追跡とそしてその論争そのものを凌ぐと思われるノージックの見解の検討は、稿を新たにして試みるほかはない。

注

- ① Begründung は通常「基礎づけ」と訳される。しかし、ここではその訳語を採用しない。Begründung は、ある言明の妥当性を導くために、それを特定の Grund に関係づける手続きを意味しているが、そうした Grund はけっして「基礎」という言葉がもつイメージでは捉えられないからである。本稿では Grund に対して「根拠」という訳語で統一し、それゆえ Begründung に対しては「根拠づけ」という訳語を使用する。
- ② 「トリレンマ」については、ポパーもまたフリース批判の際に問題にしている（XVI 121）。ポパーのトリレンマは、1. 「独断主義」、2. 「無限に続く根拠づけの手続き」、3. 「心理学主義的基盤」によって構成される。両トリレンマの比較は興味深い、ここでは問題としない。

引用文献表（〔 〕内のローマ数字は、引用する際の略号である）

- 〔I〕 H. Albert, *Traktat ueber kritische Vernunft* (1968), Tübingen 1980.
- 〔II〕 — Die Idee der kritischen Vernunft, in: H. Albert, *Plaedoyer fuer kritischen Rationalismus* (1971), München 1975.
- 〔III〕 — *Transzendente Traeumereien. Karl-Otto Apels Sprachspiele und sein hermeneutischer Gott*, Hamburg 1975.
- 〔IV〕 — *Die Wissenschaft und die Fehlbarkeit der Vernunft*, Tübingen 1982.
- 〔V〕 K.-O. Apel, Das Apriori der Kommunikationsgemeinschaft und die Grundlagen der Ethik in: K.-O. Apel, *Transformation der Philosophie* Bd. 2, Frankfurt/M. 1973.
- 〔VI〕 — Das Problem der philosophischen Letztbegründung im Licht einer

「根拠づけ論争」が意味するもの（越智）

transzendentalen Sprachpragmatik, in: B.Kanitschneider (Hrsg.),
Sprache und Erkenntnis, Innsbruck 1976,

- 〔VII〕 — 「科学時代における責任倫理の合理的基礎づけ」(1985.3.の日本講演)『思想』739号 1986.1.
- 〔VIII〕 B.Bauch, *Wahrheit, Wert und Wirklichkeit*, Leipzig 1923.
- 〔IX〕 H.Hülasa, Baron Albert im Trilemma, in: *Studia Philosophica* Bd. 36, 1976.
- 〔X〕 E.Husserl, *Cartesianische Meditationen*, in: Husserliana Bd.1, den Haag 1963.
- 〔XI〕 W.Kuhlmann, Zur logischen Struktur transzendentalpragmatischer Normenbegründung, in: W.Oelmüller (Hrsg.) , *Materialien zur Normendiskussion* Bd.1, Paderborn 1978.
- 〔XII〕 — Reflexive Letztbegründung. Zur These von der Unhintergebarkeit der Argumentationssituation, in: *Zeitschr. f. philos. Forschg.* Bd.35, 1981.
- 〔XIII〕 R.Nozick, *Philosophical Explanations*, Cambridge 1981.
- 〔XIV〕 K.R.Popper, *Conjectures and Refutations, the Growth of Scientific Knowledge* (1962) , New York 1968.
- 〔XV〕 — Die Logik der Sozialwissenschaften, in: Th.W.Adorno u. a., *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie* (1969) , Darmstadt 1981.
- 〔XVI〕 — *Die beiden Grundprobleme der Erkenntnistheorie* , Tübingen 1979.
- 〔XVII〕 A.Schopenhauer, *Ueber die vierfache Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde*, Hamburg 1970.

(広島大学)

Vom Sinn der Begründungs-Kontorverse

Mitsugu Ochi

Zur Zeit finden wir in Deutschland ein wichtiges philosophisches Streitgespräch über die Möglichkeit der Erkenntnis im Gang. Man könnte es die Begründungs-Kontroverse nennen. An dieser Kontroverse beteiligen sich der kritische Rationalismus H. Alberts und die Transzendentalpragmatik K.-O. Apels sowie W. Kuhlmanns. Jener lehnt die Möglichkeit der Letztbegründung ab. Im Gegensatz dazu bemüht sich diese, sie gegen jede Kritik zu schützen.

Die Absicht der vorliegenden Abhandlung liegt darin, den Sinn der Begründungs-Kontroverse zu betrachten und sozusagen diejenige Qual der gegenwärtigen Philosophie herauszuheben, welche Kontroverse in sich enthält.